Oliver Goldsmith: *The Vicar of Wakefield* にみられる *Job* の影響

太　田　藤　一　郎

モーゼ以来の報償的思想にたいする疑問は，予言者たちをして救世主の出現を待望させると同時に，ヘブライ民族の使命の再考と，疑問の解決をはからせ，その結果ヘブライ人は，懐疑の文学，すなわち伝道の書とヨブ記とを作り出した[1]．旧約聖典39巻は，モーゼ五書，歴史書，文学書，予言書に分類され，文学書の中には，ヨブ記，詩篇，箴言，伝道の書，雅歌がふくまれている．

Vanity of vanities, says the Preacher,
vanity of vanities! All is vanity.
What does man gain by all the toil
at which he toils under the sun?[2]

伝道の書の著者が，厭世的であるとともに，また，「罪びとで百度悪をなして，なお長生きするものがあるけれども，神をかしこみ，み前に恐れをいだく者には，幸福があることを，わたしは知っている．[3]」と比較的希望的な立場を示している．しかるに，ヨブ記の方が，その懐疑は深刻である．「主はサタンに言われた，『あなたは，わたしのしもべヨブのように全く，かつ正しく，神を恐れ，悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか．』」[4]とエホバは，ヨブの完全，敬虔な義人であることをサタンに言った．するとサタンは，「あなたは，彼とその家，および，すべての所有物のまわりにくまなく，まがきを設けられたではありませんか，あなたは彼

の勤労を祝福されたので，その家畜は地にふえたのです．しかし今，あなたの手を伸べて，彼のすべての所有物を撃ってごらんなさい．彼は必ずあなたの顔に向って，あなたをのろうでしょう．」[5]と答えている．この場合のサタンの役割は，ヨブの敬神，純粋さにたいする検査官である．[6] ヨブが神を畏れるのは，神の恩寵をこうむっているためであって，もしヨブを庇護することをやめ，彼の財産を失わせたなら，ヨブは神を呪う立場にかわるだろう，とサタンはエホバに挑戦の刄をむける．するとエホバは，「見よ，彼のすべての所有物を，あなたの手にまかせる．ただ，彼の身に手をつけてはならない．」[7] とサタンに言って，ヨブの敬神の念をためすために，サタンに，ヨブの財物を収奪することを許可している．そこでサタンは，神を畏れるヨブの敬虔を粉砕して，エホバのはなをあかそうとする．すなわち天地を舞台として，エホバと，ヨブと，サタンとのドラマが展開される．

ヨブは神を畏れ，悪から遠ざかろうとする人物，意識的に罪を犯したことのない典型的な義人で，男子７人，女子３人の子福者であり，彼の財産としては，羊7000頭，らくだ3000頭，牛500頭，雌ろば500頭，使用人多数，屈指の資産家であり，理想的な族長であった．ところが，エホバとサタンとの了解によって，ヨブの身の上に災難が続発する．シバ人や，カルデヤびとによって，家畜は奪われ，使用人は殺害され，天上から神の火降り来って，羊，しもべたちも焼き殺され，ヨブは一朝にしてその財を失ってしまう．そのうえ，荒野からの大風吹き来たって，ヨブの子供たちは倒壊家屋の下じきになり，ことごとく死んでしまう．この大災厄に直面して，ヨブは地に伏して神の御名をたたえている．

> "Naked I came from my mother's womb, and naked shall I return ; the Lord gave, and the Lord has taken away ; blessed be the name of the Lord."[8]

ヨブは，神にたいして罪を犯さなかった．神にむかって，冒瀆の言葉をは

かなかった．そこで主は，ヨブの，神にたいする節操の固いことをサタンに示している．「あなたは，わたしのしもべヨブのように全く，かつ正しく，神を恐れ，悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか．あなたは，わたしを勧めて，ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが，彼はなお堅く保って，おのれを全うした．」[9] サタンはひるまず，「あなたの手を伸べて，彼の骨と肉とを撃ってごらんなさい．彼は必ずあなたの顔に向って，あなたをのろうでしょう．」[10] とこたえ，ヨブの全身を悪性の腫物だらけにし，彼をくるしめる．彼の妻は神を呪えとヨブに言うが，ヨブは，「あなたの語ることは，愚かな女の語るのと同じだ．われわれは，神から幸せをうけるのだから，災をも，うけるべきではないか．」[11] と言って，神にたいする罪を犯さない．

この世のすべての災厄が，ヨブの上にのぞんだことを聞き，3人の隣人来って，泣き慰め，ヨブが神罰にあたったのだと言う．ヨブは彼が生れた日を呪った．3人の隣人のうち，年長者で，言葉に威厳のあるエリパズ (Eliphaz) は，ヨブの反省を要求し，無遠慮な年若いゾパル (Zophar) は，神の御心に叶うような生活をおくることを，ヨブに要求する．ヨブは隣人たちの説教よりも，直接，神と話したいと希望した．

"But I would speak to the Almighty,
and I desire to argue my case with God."[12]

神こそ，わが潔白を知り，神こそ，わが味方であると信じているヨブにたいして，ゾパルは，「天は彼の罪をあらわし，地は起って彼を攻めるであろう．その家の財産は奪い去られ，神の怒りの日に消えうせるであろう．これが悪しき人の，神から受ける分，神によって定められた嗣業である．」[13] とヨブを非難する．しかし，ヨブは，「あなたがたは，どうしてむなしい事をもって，わたしを慰めようとするのか．あなたがたの答えは，偽り以外の何ものでもない．」[14] と，むしろ隣人たちの言葉のそらぞらしさを指摘する．神の道を守っていることを確信するヨブは，神に会いたいと

願う．この世の中には，暴力と不正とが横行し，ヨブもその犠牲者の一人である．彼は潔白を確信し，正しいことを主張したので，ヨブに立腹したエリフ (Elihu) は，ヨブの言葉に知識のないこと，悟りのないことを指摘する．このとき，神はつむじ風の中から，ヨブに答えた．「無知の言葉をもって神の計りごとを暗くするこの者はだれか．」[15] 神の怒りは，これらの隣人たちにむけられた．無知，無力な人は，神の深遠な御心をうかがい知ることは出来ない．人間の本分は，神の御心に従うことである．正しい人は栄え，悪い人は滅びる．ヨブは正しく，神を畏れ，悪から遠ざかった人である．ヨブは，

"I had heard of thee by the hearing of the ear,
but now my eye sees thee."[16]

神を見たのである。神はヨブに，正しいことを行わなかった隣人たちのために，祈ることを命じ，ヨブは神の命令にしたがって祈った．神は，ヨブの誠実さにたいして，ヨブの繁栄をもとにかえし，ヨブの財産を二倍に増された．男子7人，女子3人を与え，ヨブの娘たちは世の中で一番美しかった．ヨブ記には，神にたいする謙虚さと，忍従とがある．「見よ，彼はわたしを殺すであろう．わたしは絶望だ．しかしなお，わたしはわたしの道を彼の前に守り抜こう．」[17] ヨブの災厄は，罪にたいする神の刑罰であると隣人たちは主張したが，これは，実は正統派の教理に立つと自認する者たちの主張である．この主張にたいして，ヨブの態度は一つの宗教的抗議であると言える．彼は，神の存在をうたがうことが出来ない．

ヨブ記は，B. C. 400年頃の著作と推定されているが，プロログ，対話，エピログとから構成され，プロログ及びエピログは，平明な散文体であり，大部分を占めている対話の部分は，難解な韻文体である[18]．これまでに抜粋したこのヨブ記の諸要点が，イギリス18世紀の作家 Oliver Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* に，どのような影響のあとをとどめ，そのヒントとなっているかを，比較解明してみたい．

Goldsmith によって創造された，この作品の主人公 Dr. Primrose は，三つの性格をかねた，地上で最も偉大な人物である．すなわち，彼は牧師であり，農夫であり，一家の父である．彼は喜んで教え，喜んで服従する人物，豊かな時には質素であり，災厄の時には毅然たる人物として描写されている．この人物こそ，ヨブに相当するとみなされる Dr. Charles Primrose である．Primrose 牧師夫妻は，互いに愛し合い，彼等の愛情は，年とともに深まりをみせ，美しい田舎に，善き隣人にかこまれて，上品な家庭をもっていた．寛大で，信じやすく，純真で，悪気のない6人の子供たち，男子は頑健で活発，女子は従順で，花のように美しかった．充分な私財のあった Primrose 牧師は，教会からの収入をあてにする必要もなく，牧師職を無報酬で遂行することに，秘かなよろこびを感じていた．ところが，金を信託していたロンドンの商人が逃亡したために，彼は破産，無一文になり，息子 George と近隣の牧師 Mr. Wilmot の娘 Miss Arabella Wilmot との婚約も破れてしまう．George はロンドンで働くために出発，Primrose 牧師も，年収15ポンド，副牧師の地位の新しい土地に転住する．新任地の若い地主 Squire Thornhill (thorn—いばら，苦痛を与えるもの) は，享楽主義者で，10哩以内の農家の娘たちは，大抵彼によって犯されている．

> He observed that no virtue was able to resist his arts and assiduity, ...[19]

名誉もない，節制のよろこびもない，心に太陽の光もない，この地主 Thornhill は，ヨブ記の中のサタンに相当するであろう．新任地への道中で，Primrose の次女 Sophia が激流にながされ，まさに溺死せんとするところを，Mr. Burchell という未知の男に救助される．彼は年の頃30歳ぐらい，作者はこの Burchell について，

> He loved all mankind ; for fortune prevented him from knowing that there were rascals.[20]

彼の愛情の深さを，そして，

.... his soul laboured under a sickly sensibility of the miseries of others.[29]

他人の不幸にたいしては，病的なほど感じ易い彼の魂を明らかにしている．あるいは，

The greatest stranger in this world was he that came to save it.[30]

彼は，この世の中を救済するために姿を現わした，最も偉大な人であり，Primrose 牧師の新任地の近郷を放浪しながら，大人たちや子供たちに，昔の歌をうたい，童話を話し，よろこびを与えることを，唯一のよろこびとしている．さらに作者は，この Mr. Burchell について，

.... instead of *money* he gave *promises.*[31]

このように描写しているが，彼は人びとに金銭でなく，約束を与えている．旧約，新旧にも，アブラハムにたいして与えようとする神の約束がみられるが[32]，この Mr. Burchell なる人物の，これから後の Primrose 一家にたいする，真摯な，気高い，愛情のあふれた，ヒューマニスティックな行動から考えても，作者は，彼を神の変身としているのではなかろうか．彼は，地主 Thornhill が Primrose 家にたいして演出する災厄にたいして，心利いた防塞となり，愛の救済となろうとしている．Thornhill の巧みな誘惑の言葉に，牧師の妻と長女 Olivia は，たちまち心を奪われる．しかし牧師自身は，Thornhill に警戒的であり，彼をきらった．Mr. Burchell は，Thornhill の企図を見破っているものの如く，Thornhill と Olivia との結婚を期待する牧師の妻に忠告するが，彼女は耳をかさない．娘を飾りたてる衣裳代をねんしゅつするために，持馬を売りに行くが，その代金をたくみにまき上げられる．Thornhill のきもいりで，2人の娘を都会に送ろうと希望する牧師の妻の無知な，危険な計画を，Mr. Burchell は中止させようとする．Mr. Burchell は，都会の上流階級の不実を知っ

ていたのである．田舎の生活しかしらない，純真な2人の娘たちの，だらくを防せごうとした．Mr. Burchell の正しさ，いつわりのない愛情を，かりに一時的にせよ，誤解した Primrose 牧師は，Mr. Burchell を次のようにこうげきする．

> "Both wit and understanding," cried I, "are trifles, without integrity; it is that which gives value to every character. The ignorant peasant, without fault, is greater than the philosopher with many; for what is genius or courage without an heart? An honest man is the noblest work of God."[8]

しかしながら，実は 'An honest man is the noblest work of God' に該当するのが，正しい心 (integrity)，愛情 (heart) をもった Mr. Burchell の，今までの行動であったことに注意する必要がある．

長女 Olivia は，Thornhill の手先の者に誘導されて駈け落ちする．不幸な牧師は，

> .... "all our earthly happiness is now over! Go, my children, go, and be miserable and infamous; for my heart is broken within me!"[9]

失望と激怒におちいるが，牧師は，Olivia が悔い改めて家に帰ってくるあかつきには，娘を許し，迎えてやろうと決心する．

> "Yes the wretched creature shall be welcome to this heart and this house, tho' stained with ten thousand vices."[10]

彼の妻に述懐する牧師のこの言葉には，深い愛情，寛恕の精神を発見する．この事件は，聖書の中の「放蕩息子」(The Prodigal Son) の物語に相当する．Olivia は，あざむかれた，迷える神の仔羊である．娘のそうさくに出た Primrose 牧師は，ある邸宅で Miss Arabella Wilmot に会い，またロンドンでくつじょくの生活を経験したのち，旅まわりの劇団の俳優になっている長男 George にも会う．George は，Miss Wilmot の愛の変

りないことを確認し，新しい仕事を求めて，再びロンドンに旅立つ．牧師は，家から20哩はなれた居酒屋で，悪党 Thornhill に貞操をうばわれ，すてられた，無一文の Olivia を発見し，狂喜する．

"Welcome, any way welcome, my dearest lost one, my treasure, to your poor old father's bosom. Tho' the vicious forsake thee, there is yet one in the world that will never forsake thee ;. . . ."[28]

"Yes, my child, from my heart I do forgive thee ! Only repent, and we shall yet be happy."[29]

これらの引用文は，Primrose 牧師の寛恕の精神が，地主 Thornhill によってこうむらされた一家の不名誉にたいする憤激を，解消させた瞬間の，父娘の対面を伝える言葉である．だまされて，結婚式を挙げた Olivia は，地主のいんぼうをばくろするとともに，彼女は，Mr. Burchell の蔭の援助と，好意のあったことを証言した．しかし，牧師のこの喜びもつかのまで，彼の最大の不幸がしのびよっていた．すなわち，牧師は，失った娘を得たよろこびに胸をふくらませて，夜半に家にたどりついたとき，俄かに火災起って，家も，家財も，たちまちかいじんに帰してしまった．この事件は，天上から，神の火降り来たって，ヨブが一朝にして財産を失ってしまったことに相当する．牧師が，この火災から幸いにも助け出すことの出来たのは，２人の小さい子供だけであった．しかし，牧師にとっては，焼失した物的財産よりも，子供こそ比類ない，この世の至宝なのである．

"Now," cried I, holding up my children, "now let the flames burn on, and all my possessions perish. Here they are, I have saved my treasure. Here, my dearest, here are our treasures, and we shall yet be happy."[30]

財産を失ったヨブが，悲嘆にくれて神を呪うことがなかったように，Primrose 牧師もまだ幸福感にみたされていた．けれども，牧師には次の

災難が待ちうけていた．Miss Arabella Wilmot との結婚を反対された Thornhill は，支払能力のない Primrose 牧師に，1カ年分の地代支払を要求し，家畜をとりあげ，牧師を破滅においやる．牧師は飽くまで正義を守り，不正に戦う決意を表明する．彼は Thornhill によって投獄される．獄内で，彼は囚人 Jenkinson を知る．牧師は，神を見失い，人生の方向をあやまった囚人たちに，神の教えを説き，彼等を善導しようと決心する。彼は，Olivia がしょうすいの果て死亡したというしらせをうけ，また地主の迫害がつづくが，彼は，地主にたいして今では何のうらみも抱いていないことを，Jenkinson に言明する．彼の人間愛は，至高の愛，神の愛にほかならない。こういう状況のとき，次女 Sophia が，誘拐されたというしらせがもたらされる．

> ". . . . the child that was next to my heart ! she had the beauty of an angel and almost the wisdom of an angel. But support that woman, nor let her fall. . . . "[31]

Primrose 牧師にとって，Sophia を失ったことは最大の不幸であるが，彼は神を呪うことなく，この 'But support that woman, nor let her fall' という彼の言葉は，神を想う，神への祈りの言葉である．更にこの不幸にだめおしをするかのように，地主の取巻き連中によって負傷させられた長男 George が，足械をされ，投獄されてきた．牧師は，この最悪の事態につきおとされて，なおも，神の国の永遠の平和な生活を想う．

> "I am now raised above this world and all the pleasures it can produce. From this moment I break from my heart all the ties that held it down to earth, and will prepare to fit us both for eternity."[32]

Sophia は，Mr. Burchell によって救助される．George は，この Mr. Burchell が，善行と風変りの振舞で知られている Sir William Thornhill (地主 Thornhill の 叔父) であることを発見する．囚人 Jenkinson の活

躍により，Olivia, Sophia にたいする地主 Thornhill の罪状が明らかにされ，地主は Sir William Thornhill によって処断される．次いで，Olivia の病死は，地主にたいする牧師の強硬な態度を和らげるために，牧師の妻によって仕組まれた狂言であったことも明らかになり，地主の下劣な根性，不身持，ぺてんを知った Miss Arabella Wilmot は，釈放された George と結婚，また，互に愛し合い，互にその人間的価値を認め合っていた Sophia と Sir William Thornhill とは，これまでの愛情を結実させる．

Mr. Burchell の偉大な力により，Primrose 牧師一家の者は，幸福な生活をとりもどすことになるが，さらに，牧師を破産させたロンドンの商人が，Antwerp で逮捕され，牧師の失った財産は，彼の手にかえってきた．これは，ヨブの誠実さをよみされた神が，ヨブの繁栄をもとにかえし，ヨブの財産を2倍に増された事実に相当する．

> "I am now come to see justice done a worthy man, for whom I have the most sincere esteem. I have been a disguised spectator of thy father's benevolence."[8]

これは，Mr. Burchell によって George に明らかにされた言葉であるが，'a disguised spectator of thy father's benevolence' なる Mr. Burchell こそ，神の代役であると言えよう．また，地主 Thornhill のいんぼうによって，すべての財産をうしなったけれども，敬虔で，神を想う心篤く，彼自身意識的に罪を犯さなかった Primrose 牧師，しかも病気と火傷というこころみにあったけれども，一切は解決し，神を見出し，平安を得ているこの牧師は，ヨブ，すなわち，意識的に罪を犯したことのない，敬虔な義人であり，彼自身の関知しない理由で（それはサタンの所為とされるのであるが），財産，地位，子供まで奪われ，彼自身も業病におかされたけれども，神に服従し，神を見出したヨブに相当すると見做すことが出来るであろう．悪党 Thornhill は，ヨブ記の中に登場するサタンに相当する．

悪党地主を失敗させたものは，Primrose 牧師の説教による，囚人 Jenkinson の改心にともなう地主の旧悪のばくろである．かつて悪党の一味であった Jenkinson の果した役割は，あまりにも偶然で，神秘的な性質をそなえているが，この物語の事件解決の鍵となっている．これは宗教の勝利を象徴する．人物の性格の設定，テーマの構成において，ヨブ記と，Goldsmith のこの *The Vicar of Wakefield* は，殆んどおもむきを同じくしている．これら両著作にみられる問題は，正義と愛の唯一の神によって創造され，まもられているこの世界に，どうして災厄，悪が存在するのかという理由を，探求しようとしていることである．すなわち，因果応報の問題である．繁栄が神の報酬であり，災厄は神の怒りのしょうこであるとするなら，宗教は富者のものであり，貧者の手のとどかないところにあるものだという結論に到達する．これは重大な矛盾である．ヨブ記の著者は，この矛盾を提出してヨブをして人生の禍福を越えさせ，しかも，神はしんじつに礼拝されなければならないことを教えさせたのである．Primrose 牧師の経験したかずかずの災厄も，彼の神への信仰，善の動機をしれんするために必要であった．

註

① 石田憲次著「基督教的文学観」(研究社，昭和7年出版)，120頁参照。

② *Ecclesiastes*, I, 2-3.

③ *Ibid.*, VIII, 12.

④ *Job*, I, 8.

⑤ *Ibid.*, I, 10-11.

⑥ Kathleen E. Innes : *The Bible as Literature* (London : Jonathan Cape, 1930), p. 116.

The duty of the Satan in the Book of Job is to act as an *Inspector*, or *Examiner*, of things and persons, and test their genuineness.

⑦ *Job*, I, 12.

⑧ *Ibid.*, I, 21.

⑨ *Ibid.*, II, 3.

⑩ *Ibid.*, II, 5.

⑪ *Ibid.*, II, 10.

⑫ *Ibid.*, XIII, 3.

⑬ *Ibid.*, XX, 27-29.

⑭ *Ibid.*, XXI, 34.

⑮ *Ibid.*, XXXVIII, 2.

⑯ *Ibid.*, XLII, 5.

⑰ *Ibid.*, XIII, 15.

⑱ Kathleen E. Innes, *loc. cit.*, p. 114.

The Book of Job has the distinction amid Biblical literature of being the nearest approach to drama in the Bible.

⑲ Oliver Goldsmith : *The Vicar of Wakefield* (New York : The New American Library, 1961), p. 18.

⑳ *Ibid.*, p. 20.

㉑ *Ibid.*, p. 20.

㉒ *Ibid.*, p. 31.

㉓ *Ibid.*, p. 20.

㉔ 約束とは，旧約聖書では，神がアブラハムとその子孫に国土を与える約束をしており，またその子孫の繁栄をも約束した。新約聖書では，アブラハムに神がなされた約束がひきつがれ，約束の事実として，イエスは，彼にしたがうものに「永遠の生命」を約束している。

㉕ Oliver Goldsmith : *loc. cit.*, p. 72.

㉖ *Ibid.*, p. 85.

㉗ *Ibid.*, p. 86.

㉘ *Ibid.*, p. 115.

㉙ *Ibid.*, p. 115.

㉚ *Ibid.*, p. 121.

㉛ *Ibid.*, p. 150.

㉜ *Ibid.*, p. 153.

㉝ *Ibid.*, p. 163